

ポーランドの犬達とスローフード

神奈川県 小林 武夫 (帝京大医学部 耳鼻咽喉科教授)

昨年夏、ドイツのベルリン大学の学会に参加したとき、まず隣国ポーランドのシチェツィン (Szczecin) に住む耳鼻科医の友人アンジェイ・カールス先生を(以下K先生と書く)訪ねることにした。以前からK先生がポーランドを見にきてくれといっていたのである。K先生は愛車シコダ(チェコ製)をとばして、ベルリン空港まで迎えに来てくれた。シチェツィンは第二次大戦までドイツ領のステッティン(Stettin)で、バルト海に注ぐオドラ河の河口にある港として賑わい、緑の多い落ち着いた街である。ヒトラーの造った文化遺産の一つといわれる高速自動車道路で、ベルリンから一時間半しかかからない。K先生は、古い立派なアパートに、もと大学教授(数学)の95歳の母親と二人で住んでいた。彼の父親は高名な弁護士であったが、10年前に亡くなった。

母親は全くボケていない。彼女は、私のためにポーランドの伝統料理をつくりながらも、シチェツィン生まれでロシアの女帝となったエカテリーナ(1781年ペテルブルグで日本の大黒屋光太夫を謁見した)の分厚い伝記をフランス語で読んでいた。彼等はポーランド語以外に、仏、英、独、露をあやつる。(ポーランド人はこの順にきらいになる。ショパンもキュリー夫人もフランスで名をなした。)日本語ができなくて申し訳ないという。ホテルを世話してくれと頼んでおいたのに、自分の家に泊まれと言ってきかない。彼の好意に甘えて、お嫁に行った娘さんの使っていた部屋に泊めてもらうことにした。

さて、K先生は2頭の犬を飼っている。中型の一頭はドイツからきたポインターである。威厳があるが、とても人なつっこい犬である。16歳。名はヘキサという。K先生の趣味は猟である。なにしる、ポーランドは森が多く、東部のロシアとの国境近くは、野生のバイソンが生息する、ヨーロッパで唯一の場所である。シチェツィンの郊外も猪などは多いらしい。もう1頭はソーニャという温和な胴長の小型犬でダックスフントがヒゲをつけたようである。ヘキサは面倒見がよい。2頭が散歩中に近所の犬がソーニャにう

るさくまとわりつくと、ヘキサはその犬をワンッと一喝して退散させた。

数年前に、K先生がヘキサを連れて森を散歩して帰る頃、ソーニャがどこからともなく現れて、森の入り口に停めてあった彼の車までついてきて離れない。彼は飼い主が現れると考え、日が暮れるまで待っていたが、無駄だった。ソーニャはどこにも行こうとしない。彼は、この小犬を連れて帰ることにして、「犬を預かっている」と書いた紙を公園の入り口におき、連絡先も書き加えた。翌日も、ヘキサとソーニャを連れて、森に散歩に行ったが飼い主はあらわれない。この小犬の耳介には、入れ墨がしてあったから飼い主がいるに違いないと思った。彼は新聞にも迷い犬の広告を出したが反応はなかった。とうとう彼は、犬好きの母親とも相談して、ソーニャと名付けて、自分で飼うことにした。そのため、ソーニャの正確な年齢は不詳である。K先生はヘキサより少し若いようだという。

K先生の犬達の取り扱いはとても丁寧である。車に乗せるときも、両手で胸と腹を支えて水平に抱き上げる。こうしないと犬に負担がかかるという。一度、私が両手で首のあたりをつかんでぶら下げるようにして車に入れたところ、注意された。

ここで犬達の食餌について書く。私が泊めてもらった翌日、彼は朝から台所で働いている。みると、大鍋に大麦、ひき割り燕麦、野菜を入れて煮ているのである。冷蔵庫に保存して一週間分の餌にするという。献立は以下のようなものである。

「朝」：ミルク、パン。

「午後」：前記の穀物を煮たものに、新鮮な肉。(春と秋はビタミンを添加する。)

彼は犬の食餌も愛情をもって用意しなければいけないという。工場生産のドッグフードは利用しない。ポーランドのEU加盟以来、国外からドッグフードも入ってきて、少し高価であるが、利用することは可能である。彼はシチェツィンの地区病院の院長を歴任しVIPの一人であるから、ドッグフードの購入には経済的に困難がある訳ではない。彼によるとドッグフードのようなファーストフードは犬の健康には必ずしも良くないという。犬にも、手間をかけてつくった心のこもったスローフードを与えることが大切だという信念をもっているのである。その甲斐あって、彼の2頭の犬は耳は少し遠くなったが、元気らしい。最近もヘキサは今年で17歳になったと手紙をくれた。また、ポーランドに行つてこの犬達に会いたいと思っている。(2004年10月記)

【本稿は「動物文学・第70巻第1号」より、編集者・筆者のご厚意によりその一部を加筆し掲載。】

